
OLL

Hank.Wott

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

OLL

【Nコード】

N5433P

【作者名】

Hank·Wott

【あらすじ】

あの時『あの男』に求めたのが、金でも、愛でもなかったことだけは間違いなく確かだ。

【快樂通り】の、と或る娼夫の追想。

デルタ

…

私がそう名付けられたのは十年も前の八月。激しい雨の降りしきるありふれた熱帯夜のこと。

その日、五つ年上の姉が死んだ。客の男に盛られた薬が効き過ぎたらしいと、母がぼやくのが扉越しに聞こえた。

…すなわち【人形：DOLL】

姉がそう名付けられたのは確か私が六歳だった夜。

…貴女もそろそろお客を取らないと…母さんの店を継いでいかなくちやいけないんだから…ほら、お客様に挨拶して…愛想よくしなくちやあ駄目じゃない…

今日から貴女は なんだから…

…すなわち【娼婦：DOLL】

【快樂通り】に溢れる派手な衣裳の客引き女…男…少年…少女…その間を、腐肉を求めるハイエナよろしく闊歩する無数の欲望。

私の母親はその一つであり、姉もついにはその一つを成し、

そして、私の父親も例外なくその一つであった。

「貴方のお父さんよ」

幼かった頃一度だけ会ったその男は母より遥かに若く痩せた体で、口元に柔和な笑みを湛えていた。母の店を訪なう客にしては妙に誠実そうな男だった。

「ほら、プレゼントをあげよう。大切なお前に、特別な贈り物だ」手渡されたのは淡いピンク色をしたウサギのヌイグルミ。それはふわふわと柔らかく私には未知の感触だった。

私は笑った。男が微笑んで、たぶん母も笑っていた。

そしてその夜、父親は死んだ。

何でも自宅寝室で妻と無理心中を図ったとかで、後には借金の督促状だけが残されていたと言う。

そうして、薄汚れたそのヌイグルミを抱きしめて迎えた八月の夜。店の娘たちを粗方送り出して、十何人目かの愛人相手に母は呟く。

「私ももう子供を産める歳じゃあないし…可哀想だけれど、店はおの子に任せるしかないわね」

「あの子って…末っ子の、茶髪の子だろ？確か、男の子じゃ…」

「だから貴方に話してるのよ。貴方なら万更未経験ってわけでもないから…ねえ、面倒見てやってくれない？」

「まあ…弟の仕切ってる店なら雇ってくれないこともないだろうけど…少し幼過ぎないかい？」

「あの子もう十歳よ。姉の娘だって十歳から店に出たんだから、もう十分使える歳だわ」

怒りよりも恐怖よりも、絶望が先だった。流す涙さえ忘れて、私は茫然と扉のこちら側に立ち尽くしていた。

椅子を引く音、立ち上がる二人。男の革靴と母の紅いハイヒールが床を叩く。母の細い指がドアノブをゆっくりと回す。

嗚呼、この扉が開かれたら私は、

…すなわち【娼夫：DOLL】

「居ないわ…さっき寝かし付けたはずなのに」

「窓から逃げたか…よりによってこんな雨の日に」

「どうしよう、あの子が居なくなったら、私は…」

「大丈夫、落ち着いて。幸い未だこの時刻だ。行方を尋いて回ればすぐに見つかる。それに…これは案外チャンスかもしれないよ」

「え…？それは、どういう…」

「だからね…」

01（後書き）

この娼夫の正体は本編で明らかに、なるかもしれないし、ならないかもしれない。

逃げ込んだ路地裏。薄手のシャツに雨は染み透り、抱いたウサギもずしりと重い。

目の前には無数の眼があつた。腐敗した生ゴミの悪臭に交じって獣の臭い。低い唸りが雨音の底に響いている。

「ああ……っ」

怯えて、私は声を上げた。それが全ての引き金となった。

咆哮。柔らかな布を引き裂く音。

銃声。近付いてくる革靴の足音。

「大丈夫かい？ぼうや」

雨に掻き消されていく獣の血痕。強い黒毛の屍に交じって水を吸った白い綿が散らばる。

「ああ…ウサギが…」

「ほら、泣いては駄目だよ。代わりにおじさんが、もっと素敵なヌイグルミを買ってあげるから」

幼心を感じる違和感。それは親切ごかした欲望の囁き。

気付けば男の手は腕を掴み、私は引きずられるように歩いていた。

「何のヌイグルミを買ってあげようか…ウサギかい？それとも、クマなんてどうだろう」

「嫌だ…僕はそんなの欲しくない…何処へも行きたくない」

「恐がらなくていい、さあ、おいで。そのままでは風邪を引いてしまふよ」

「嫌だ、放して…僕は、」

僕は… になんてなりたくない。

#02（後書き）

だいぶ短い。というか、短すぎる（汗。

そして今夜。忌まわしき記憶を呼び起こす八月の熱帯夜の雨。申し訳程度のアーケードの下、それでも【快樂通り】は常と変わらず、すこぶる煌びやかである。

その片隅の酒場にて、

「なあ、お前今週幾ら稼いだ？」

「噂じゃ軽く十万越えだろ？まったく、羨ましいかぎりだな」

「ま、見習いの頃から先輩のオレより稼いでたしな、その女顔で」

「先輩は顔だけでなく、性格までイマイチでしたからね」

笑い声。酒を酌み交わすグラス。憂鬱なる娼夫達の束の間の休息。

「知ってるか？何でも、この通りにアイツが来てるって噂」

けなされても懲りない先輩娼夫が言ってその隣、彼より二つ年上で同期の男が慌ててその口を塞ぐ。

「馬鹿！！噂の張本人の前でそんなこと言う奴があるか！！」

三人して見やった奥のテーブルに銀髪を通り越して白髪の若い男。

腰に剥き身で吊られた大口径の拳銃が薄暗い照明を反射する。

犯罪組織DD幹部 桜庭。やたら金を持っているとの噂だが下手すれば生命を落としかねないと、我々娼夫の業界ではちょっとした恐怖の的となっている人物だ。

「アレが…桜庭…」

「おい、あんまり見るなって。もしも変な気でも起こされたらどうす…っておい！？松崎！？」

先輩娼夫の忠告虚しく、私は既に立ち上がっていた。そして、桜庭も。

不意に黙りこくった店内で、私と桜庭は向かい合うようにして立ち尽くしている。

「…お前、名前は？」

先に口を開いたのは桜庭だった。

「職業柄本名は明かせませんので…　とても名乗りましょうか」
私の、母親から与えられた称号。

「ねえ…。で？【快樂通り】の二流娼夫が俺に何の用だ？」

「お察しの通り私は娼夫ですから客に言うことは一つですが…、
敢えて言いますようか？」

「俺に『買え』って言うてるのか？」

桜庭は一瞬驚いたような顔をして、それはすぐに共犯めいた笑みに
変わった。いいだろう、と私を真直ぐに見据えた。

「今夜零時に、この店の前にタクシーを寄越してやる。…もしお前
が本気なら、一人で来てみる」

桜庭が言って、静まり返った傍観者が息を呑む。あの娼夫は死ぬ気
だと、聞こえよがしに呟いた奴さえ居た。実際、私自身でさえ、自
分が正気なのかどうかの確信はない。しかし、この状況にどこか陶
酔している自分が居るのは紛れもない事実だった。

「お前、どういふつもりだ！？死にたいのか！？自殺願望でもある
のか！？」

保守派の先輩娼夫は桜庭が居なくなるや否や、私の襟首を掴み上げ
て吠える。

「別に」

猛り立つそれを見上げて、私は不敵に笑ってみせた。

「少し興味があっただけです。毎日毎日同じような客ばかりで、い
い加減嫌気が差していたところでしたし」

「興味って、お前…っ」

「止めときなつて、無駄だから。昔からこいつはそういう奴だった
じゃないか。…　は俺たちみたいな、延々同じことの繰り返しが嫌
なんだろ」

諦めたようにもう一人が言って、それに同調したのか無駄を悟った
のか、不本意そうながらも手を離す。

「それでは…お先に失礼します」

くぐり慣れた建付けの悪い扉。それを出るとき、何となくもう二度と此処へは帰ってこないような、そんな予感がした。

#03（後書き）

「あの人」がログインしました。

「早かったな」

風呂上がりなのかバスローブのまま、三人掛けソファを一人で占拠した桜庭は言った。

その向こうには三方に開いた硝子越しの視界。欲望塗れの通りも清楚なビジネス街も等しく、降りしきる闇の底に沈んで見える。

手配されたタクシーの運転手は、ご丁寧にも某ホテルの最上階に陣取った桜庭の部屋まで私を案内してくれた。何でも、途中で逃げ出さないように、と依頼を仰せ付かって、チップをはずんで貰ったのだとか。元々逃げるつもりなどなかったし、ホテルのフロントで男の部屋番号を告げるのも億劫だったので、私としてもそれは歓迎すべき手回しだったと言えるよう。

「ぼけつと感傷に浸ってる暇があるなら、カーテンくらい閉めろよ」
見向きもせずに指だけで窓を示す。私がそれに従ったのを確認してから、テーブルに広げた銃器だの弾倉だのを乱暴にジュラルミンケースへ投げ込んで、それをダブルベッドの下に蹴り込んだ。

「ったく…支給の銃はろくなもんがない。これなら地下街の闇商人から買った方が確かだな」

ぼやきつつ、背後から、カーテンに手を掛けた私の腰に手を伸ばす。

「…にしても華奢な奴だな。本当に男か？」

「ええ、真正正銘、男です」

正直、あまり女扱いされるのは好きではない。小さい頃こそ姉に似て可愛いと誉められてはいたが、今では大抵が嘲笑か品定めか。

「お前、不機嫌なのがすぐ顔に出るんだな」

「すいません、素直な性格なもので」

勿論これは嫌味であるが。

大体、これから男に弄ばれようかというときに機嫌よく居られるわけがない。客にその自覚があるかないかは別にして、仕事中の娼夫は皆少なからず不機嫌なのだ。

全てのカーテンを閉めると途端に部屋は暗くなる。こうしてみると環境保全団体が口煩く節電を叫びなくなるのも解るような解らないような、

「おい」

ぐい、と桜庭が私のネクタイを引っ張って、上向いた私と俯いた桜庭とで不意に顔が近くなる。

気まずい沈黙。

基本相手に委ねる主義の私としては、この体勢で制止されるのは限りなく反応に困る状況である。

「お前、何で俺とこんなことする気になったんだ？」

鼻先で桜庭が問うた。心底見当が付かないという顔をしている。本音を言えば、私も未だ適当な理由を見出せずにいた。仕方なく、先輩娼夫に話して聞かせたのと同じ建前でお茶を濁す。

「興味本位ですよ。普通の男はもう飽きたんで」

「普通の男ね…確かに、俺は普通ではないかな」

自嘲的に言つて、唐突に、その右手の指は私の喉へと絡み付く。

「……っ!？」

息が詰まる。思わず桜庭の手に爪を立てて、桜庭は唇だけで笑っている。

「まあいいさ、お望み通りせいぜい楽しませてやるよ」

そして、私の意識は途絶える。

#04（後書き）

わぁお。

しかし、露骨な性描写は一切ないので安心してお召し上がりください！！

荒い呼吸。冷たい床の感触。濡れて纏わり付いたシャツをはだけていく指先。逃れようと足掻いても擦じ伏せる腕の力が増すばかり。

「さあ、ぼつや…」

嫌だ…僕は、お前の玩具なんかじゃない…僕は　なんかじゃ…

「…痛いかな？」

耳元で、低い声に囁かれて眼を開ける。僅かに身じろぎして、シャツが擦れる聞き慣れた音を聞く。一切の関心を失った眼が私を見下ろしていた。関心…寧ろ、感情を失ったとも言っべきだろうか。恐ろしいほど無表情な瞳。

「厭なんだろ？本当は。男とこんなことするのはさ」

「そんなことは…」

それは言わないお約束、というやつだ。よほどの好き物でもない限り、これら一連の行為は報酬を得るための作業でしかない。そう割り切っている。それなのに、この割り切れない感情へ踏み込もうというのは不躰以外の何物でもない。

私は露骨に不機嫌な表情をした。

「少なくとも今は、私は望んで此处に居る。…それで、答えは満足ですか？」

「嘘だろ」

私の上で、桜庭は歪に微笑んでみせた。まるでウサギの頸椎を優しく噛み砕く才力ミのように。戦慄にも似た感覚に背筋が凍り付く。
「模範解答を教えてやろうか。」

言い聞かせるように、桜庭は私を呼んだ。

「誰もお前の意志なんて気にしない。お前は常に、欲望に求められるがまま身体を提供しているだけに過ぎない。金を得るためだと言いついて聞かせてはいても、結局、お前が本当に欲しいのは、金でも愛でもない……」

自由だ。

「……だから、俺を選んだんだろう？」

それは呪いのように甘美な響きを持っていた。生れ落ちたのは世界の裏側。腐り切った果実のような日常。それを振り切ろうと必死になればなるほど深みに嵌まっていく。

「私は……」

その時、床に脱ぎ捨てられていた革ジャケットのポケットでケイタイが鳴った。桜庭は暫く黙殺していたが一向に鳴り止む気配はなく、やがて不満げな表情で私の上を退いた。

「あ？何？…また下つ端の尻拭いかよ……」
「たたく、久々の休暇だつてのに……ああ、忙しいんだよ今。お取り込み中だ。……は？今すぐ？」
舌打ちしてちらりと私を見やる。尚もケイタイの向こうでは声が續いていよう、忌々しげに投げ遣りな返事を返している。

「……解つたよ、行つてやる。その代わり後三日は帰らないからな」
一方的に休暇延長を宣言して、通話を切つた。ケイタイをソファへ放るとすぐさま手荒く私をベッドの端へと追い遣り、枕の下から例の拳銃を掴み出す。

「あの……」

「そういうことで、悪いな」

口を挟む隙さえ与えずに、桜庭は既に脱ぎ散らかしていた服を着出している。

「報酬は、ベッドの下からお前の好きな方持つて行け。…まあ、別に両方持つて行っても構わないけどな、邪魔になるだけだし」

鍵はオートロックだから、適当に休んだら勝手に出て行け、とも。言いたいことだけ一方的に告げて、

じゃあな、と背越しに片手を挙げた。私の方など見向きもせず、扉が閉まり、鍵がガチャリとひとりでに回る。

急に、全裸でいることに寒さを感じた。

片手を突いてのろのろと起き上がり、見遣ったベッドサイドのデジタル時計は未だ朝の三時を示している。

「報酬……」

覗き込むと、桜庭の言った通りベッドの下には大型のトランクケースが二つ、蹴り込まれていた。その内一つは札束の詰まった革性のケース。そしてもう一つは、

「……………自由、か」

#05（後書き）

もっと過激なもの、書き溜まっているんだけど、如何せんあげるタイミングがわからない（苦笑）

雨は、あがつたようだった。

【快樂通り】は眠らない。

延々と毒々しい色合いのネオンが瞬き、欲望に糸引かれる人形たちが行き交う。蒸し返す熱気に嫌気がさして、人込みを避けるように細い路地へ折れた。途端に喧騒が遠くなる。が、

「お前、娼夫だろ？」

立ち塞がる不穏な影。思わず後退って、しかしそれはもう一人に阻まれる。手首を掴まれ、しかしそれを振りほどくほどの力はない。

「解るぜ、その分不相応な服見りやあな。大方貢ぎもんなんだろ？それとも身売りの報酬か？」

「放して下さい」

男は薄ら笑いを浮かべたまま、おもむろに自分の胸ポケットから札束を抜いた。

「知ってるか？この通りでは、客が娼夫に何をしてても罪にはならないってこと」

傲慢な物言いと札束で以って頬を撫でるやり方に、私は少なからず嫌悪を覚えた。

「…何が言いたいんです？」

「つまり、金さえ払えば何をしてても許されるってことだ」

「ふん…何かと思えば、罪を犯す度胸もない臆病者でしたか」

呆れた。相手を逆上させるだろうことはわかりきっていたが、そう言っただけではいらなかった。案の定、男は見る間に顔を紅潮させ、口汚く喚いてその腕を振り上げた。

「黙れ！！！！」

真横からの拳に頬を打たれ一瞬意識が遠退きかける。鈍い激痛が頭蓋に響く。

口内に広がった血の味を吐き捨てて、男を睨みつける。淀んだ瞳と定まらない焦点。酔っ払いか、薬物中毒者か、どちらにせよあまり喜ばしい状況ではない。朦朧とした意識で必死に打開策を模索しても、それが悪あがきでしかないことは自分がよく解っている。

「娼夫の分際で、客に楯突くな」

不明瞭な罵声。狂ったようにめちやくちやに振り下ろされる腕。後ろの男が怯えて手を離し、支えを失った私はそのまま地面へ倒れ臥す羽目になった。鉄臭い味と土の感触が舌に滲む。

「娼夫の分際で」

…自分は何様のつもりなのか。

「客に身体を売ることしか出来ないくせに」

…自分は何を出来ると過信しているのか。

嗚呼…こんな奴等が自由なのに、

何故…私ばかりがこんな目に…？

「もう止めとけよ。本気で死んじまうぞ」

見かねたらしい後ろの男が殴り続ける腕に手を掛けたが、それは呆気なく払われた。

「こんな…こんな奴等が居るせいだ。他人に媚び売るだけの、こいつ等さえ、居なくなれば」

…それは、こっちの台詞だ。

「死ねばいい…」

上着のポケットに触れる重い鉄の塊。私はそれに手を伸ばして、男は未だ気付かない。

「死ねばいいんだ…」

こいつ等さえ居なくなれば私は、

自由…

予想していた衝撃はなかった。代わりに、生温かい液体が点々と肌に散った。地面に仰向けのまま、桜庭から支払われた“報酬”を構えていた。視界の端に、私を押さえつけていた男が何か泣き喚きながら逃げていくのが逆さまに見える。

「死んでしまえ…」

引き金を引く。男の後頭部に赤色が飛沫き、壊れたマリオネットのように膝から崩折れる。

そのとき、路地を歩いてきた若い娘が私を見て、仲良く並んだ二つの死体を見て、甲高い悲鳴を上げて道を引き返していく。人を、呼びに行ったのだろうか。そうならば私は、この“自由”を奪われて…

「

随分と派手にやったな、
些か混乱した頭で、鼓膜が捉えたのは忌々しいあの名を呼ぶ声。視線を上げると、深い闇を湛えた銃口と目があつた。

「あ……………」

人差し指は油断なく引き金に掛かり、僅かにでも私が動けば躊躇なく発砲するだろう。今しがた私が行使したのと同じだ。背筋を冷たい汗が伝っていく。

「気に入った。匿ってやるから俺の居る組織に來い。Fに紹介してやるよ」

こちらに一切の拒否を許さない要求。顔半分を覆うほどの一眼ゴーグルを外して囁いたのは、

「桜庭…」

遠くで、サイレンが鳴っている。それは自由と名付けられた悲劇の

憂鬱なる序曲に似ていた。

E
N
D

#06（後書き）

白髪の方の桜庭さんは公式でバイセクシュアル設定です（爆。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5433p/>

OLL

2010年12月25日19時14分発行